

# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 「カサンボコ」と「デギョウ」：  
子育てと民俗学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 比呂美, Hattori, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000701">https://doi.org/10.57529/00000701</a>

# 「カサンボコ」と「デギヨウ」

子育てと民俗学

服部比呂美

五年前から民俗研究に通っている静岡県周智郡森町へは、新型コロナウイルス感染症の流行から赴くことを控え、すでに二年が経過しようとしている。この町の円田という集落には「カサンボコ（傘鉦）」と呼ばれる初盆行事がある。森町をはじめ遠州地方では、家族を亡くした家々で初盆が丁寧に行われるため、「葬式が二度ある」と言われるほどだが、さらに、青年や子どもによる「大念仏」や「カサンボコ」などの死者供養も行われるのである。

円田の「カサンボコ」では、小学生たちが、八月十三・十四・十五日の三日間にわたって新仏のある家を訪れ、和讃を唱える。先頭の子どもが赤い傘を持ち、そのほかの子どもたち、さらに大太鼓と締太鼓を載せた「盆車」が続いて集落を巡行する。新仏のある家では、遺影を庭に面した縁側などに飾り、カサンボコの子どもたちは庭に入ると遺影の前に並び、「親和讃」「子和讃」「妻和讃」など故人にふさわしい和讃を唱える。家々では、和讃が終わると「ありがとうございまして」と子どもたちに頭を下げてお布施を渡し、飲食の接待をする家もある。

夕暮れ時を過ぎると、赤い傘の中の行灯に口ウソクが灯され、おぼろな光に導かれた子どもたちの行列が農耕地の間を進む姿は、絵灯籠のようである。人びとは風に乗って聞こえてくる太鼓の音色に耳を傾けながら故人を懐かしむ。子どもたちの透明感ある声は耳福といえるもので、現在は女兒も参加しているが、かつては声変わり前の男児が和讃を唱える役を果たしていた。

三年間、カサンボコに同行した最大の収穫は、子どもたちの言動を観察する中で、彼らが単に小遣い稼ぎのためにこ

の行事に参加しているわけではないことを実感できたことであつた。厳密に言えば、こうした行事は保護者の協力なしでは成り立たない。子どもたちは親の前ではけつて口を開かないが、子どもだけの場面では「最後まで頑張ろう」と声を掛け合う。彼らは、行く先々で丁寧に迎えられる体験を重ねながら、故人の供養を託されているという役割を自覚する。そうであるからこそ、猛暑の中でも任務を遂行するために最後まで「頑張る」のである。

ところで、森町には子どもに關する「オデンギヨウ」や「デギヨウ」などと呼ばれる民俗がある。これは「出饗」、つまり「出振る舞い」のことで、妊婦が臨月となつた戌の日に、嫁人の実家から紅白や黄白の丸餅が贈られ、婚家ではこれを近隣に配るというものである。この民俗には、胎児が近隣から社会的な「いのち」の公認を受けるという意味がある。同様の意味を持つ妊娠五カ月目の戌の日の「帯祝い」や出生後七日目の「お七夜」は全国的に知られており、当地でも行われているが、これに加えて、森町やその周辺の袋井市、掛川市、磐田市などには「デギヨウ」がある。

同地域は、子どもたちによるカサンポコの分布を見ることができ、地域でもある。つまりここでは、集落の一員として出生前から近隣の大人たちに見守られてきた子どもが、新盆ではカサンポコによって世話になつた大人を供養してきたということが出来る。つまり、人間の生死という循環的な時間の中で、子どもの成長を後押しする民俗文化が育まれてきたといえよう。

コロナ禍の中、「こども庁」の創設の報を聞いた。給食で生命の糧を得る子ども、学校や家庭から逃れられずに命を絶つ子ども……子育てを支援するための新たな行政窓口は間違ひなく必要である。しかし、その際に「古いもの」「わずらわしいもの」「無駄なもの」として切り捨てられてきた民俗を視野に入れてほしいと願わずにはいられない。民俗は「絵にかいた餅」ではなく、人びとが生活の中から創り出した文化が「具体的な形」で提示されてきたものだからである。

(日本民俗学／子どもの民俗文化)